

平成21年度スーパーサイエンスハイスクール研究開発実施報告（要約）

① 研究開発課題	
「持続可能な開発」に創造的に取り組む科学者・技術者を育成する教育課程の研究	
② 研究開発の概要	
<p>地球規模で思考でき行動できる人材育成の基盤を「持続可能な開発のため教育（Education for Sustainable Development）」（以下E S D）に求め、科学者・技術者に必要な基礎的な能力、とりわけ創造力を育成するために必要な教育課程・教育内容を開発することを主要な目的とする。そのために以下の（1）～（5）の教育内容の開発研究を行う。</p> <p>(1) 先端科学の内容と先端科学を支える創造性を学ぶ教育プログラムの開発 (2) 教科学習における創造性を育むための教育内容・教育方法の開発 (3) E S Dの内容開発 (4) 学校設定科目の開発 「サイエンスコミュニケーション」, 「数理解析」, 「宇宙・地球科学」, 「生命科学」 (5) 海外研修プログラムの開発</p>	
③ 平成21年度実施規模	
<p>全校生徒を対象とする。高等学校第2, 3学年にはスーパーサイエンスコース（以下S S コース）を設置し、当該コースにおいては理数系に重点を置いた教育課程を編成する。また、中学校教育との連携を強化し、一部のプログラムでは中学生と高校生が共に学ぶ場を設ける。</p> <p>（平成19年度入学生198名の内S S コース41名, 平成20年度入学生204名の内S S コース40名, 平成21年度入学生200名）</p>	
④ 研究開発内容	
○研究計画	
年次	実施計画
	①先端科学の内容と先端科学を支える創造性を学ぶ教育プログラムの開発
	②各教科における創造性を育むための教育内容・教育方法の開発
	③E S Dの内容開発
	④学校設定科目の内容開発
	⑤海外研修プログラムの開発
	①特別講義, 研究室訪問学習, 研究実践学習, 宇宙・地球科学研修, 課題研究を実施する。
	②全教科の計画に基づいて, 中学校および高等学校の両方で実施する。
	③開発テーマに沿って小単元を実施する。
	④通常の授業時間を利用しながら, 教育内容の開発およびその評価を行う。
	⑤オーストラリア研修において, 自然環境保全を学習するプログラムを開発する。
	①特別講義, 研究室訪問学習, 研究実践学習, 宇宙・地球科学研修, 課題研究を実施する。
②全教科の計画に基づいて中学校および高等学校の両方で実施する。	
③開発テーマに沿って小単元を実施する。	

	④開発した内容を実施し、教育内容の妥当性を検討する。
	⑤オーストラリア研修において、自然環境保全を学習するプログラムを実施する。
第3年次	①特別講義，研究室訪問学習，研究実践学習，宇宙・地球科学研修，課題研究を実施する。
	②全教科の計画に基づいて実施する。
	③E S Dの開発した内容を実施し，教育内容の妥当性を検討する。開発したE S Dの内容をまとめる。
	④実施予定の学年・クラスで実施し，教育内容，方法の充実を図る。
	⑤ユネスコスクールプロジェクトネットワーク（Associated School Project Network: ASPnet）を活用し，海外A S P校との連携を検討する。
第4年次	①第3年次までの成果を踏まえ，特別講義，研究室訪問学習，研究実践学習，宇宙・地球科学研修，課題研究を実施する。
	②第3年次までの成果を踏まえ，各教科の計画に基づいて新たな視点で創造性の育成を検討する課題で研究に取り組む。
	③第3年次に引き続き内容のまとめを行う。
	④第3年次までの成果を踏まえ，研究開発の成果をまとめる。
	⑤海外A S P校との交流プログラムを開発する。
第5年次	①これまでの成果を踏まえ，プログラム全体を再評価し，創造力を育成する科学プログラムとして完成させる。
	②教科毎に研究の総括を行う。
	③ユネスコスクールとしてE S Dの国際的な活動に主体的に参画する。
	④作成した教材を使用し，教育内容を検証する。
	⑤海外A S P校との交流プログラムを実施する。

○教育課程上の特例等特記すべき事項

平成19年度入学生のS Sコースでは「家庭総合」1単位および「情報C」1単位を減ずる。平成20年度以降の入学生のS Sコースでは「情報C」1単位を減ずる。この特例は学校設定科目および課題研究の時間を確保するために必要である。

○平成22年度の教育課程の内容

平成19, 20, 21年度入学生の第2学年S Sコースでは「サイエンスコミュニケーション」1単位，「数理解析」1単位，「宇宙・地球科学」または「生命科学」3単位を開発する。ただし，平成20, 21年度入学生では「サイエンスコミュニケーション」は総合的な学習の時間で実施する。この変更は本研究の目的の1つである「科学の基本原則を身に付け，科学的思考を継続できる生徒」の育成のために必要である。

○具体的な研究事項・活動内容

(1) 先端科学の内容と先端科学を支える創造性を学ぶ教育プログラムの開発

科学に対する興味や関心を中学校段階から持たせるために，高校生と中学生が同時に学べる特別講義や体験型プログラムの開発を実施した。今年度は4つの特別講義，3回の課題研究発表会に中学生も参加した。高校生対象のプログラムは特別講義，研究実践学習，課題研究，サイエンスツアーなどを実施した。

(2) 各教科における創造性を育む研究のための教育内容・教育方法の研究

「自己質問カード」を利用して，単元ごとに生徒に学習内容に基づく質問を作成させるなどの取り組みを通して，メタ認知の働きを支援する授業づくりに関して各教科の特性を生かした実践が行われた。また，各教科の固有な創造性について授業実践を行った。

教科	研究テーマ
国語	思考と表現を通して学習者自身の言語活動としての「創造」を体得させるための教育内容・教育方法の研究
地理歴史 ・公民	「持続可能な社会」を担う生徒を育成するための教育内容・教育方法の研究
数学	創造的な思考を継続させるための数学的な見方や考え方の研究
理科	科学的思考力の育成における創造性の認識過程に関する研究
保健体育	動作の視点から、身体（骨格・骨格筋）の構造について理解し、合理的な「運動」について考える
芸術	芸術作品における美的要素の科学的分析および創造的活動への応用
英語	創造性育成のための自己質問カードを活用した読解授業の構築
技術・家庭	「ものづくり」を通じた、認識過程の変化の研究

- (3) 「持続可能な開発のための教育（以下E S D）」の内容開発
 S S H指定校・ユネスコスクール（ASPnet）加盟校として、E S Dを学校全体の教育活動を通して行った。特に、総合的な学習の時間を活用して実施の定着を図った。
- (4) 学校設定科目の内容開発
 今年度も昨年度に引き続いて「サイエンスコミュニケーション」, 「数理解析」, 「宇宙・地球科学」, 「生命科学」の内容開発を行った。
- (5) 海外研修プログラムの開発
 ドイツ（重点枠）およびオーストラリアにおける環境保全等について学ぶ取り組みを行った。

⑤ 研究開発の成果と課題

○実施による効果とその評価

1 生徒に対する効果

アンケート調査の結果、S S Hプログラムを実施する前と後では、S S コースの生徒に対して次のような結果が認められた。また、この効果は高等学校第2学年から第3学年に進級しても維持された。

- ①生徒の自己効力感が高い。
- ②科学の学習方法の重要性を感じている。
- ③科学を学習する価値を認識している。
- ④科学に関わる職業への関心が高い。

2 保護者への効果

「理科・数学に対する能力やセンス向上に役立つ」など、S S Hを好意的に受け止めている。

3 教員への効果

S S Hは好意的に受け止められている。また、昨年度の問題点の改善に取り組んだ結果、S S H活動がより効果的なものとなった、との認識がたかまった。

4 学校体制への効果

昨年度から意識的に取り組んでいる中学校、高等学校を通じた新たな研究の枠組みづくりが定着しつつあり、研究の推進体制が充実してきた、またE S Dを推進する体制も整ってきた。

○実施上の課題と今後の取組

1 先端科学の内容と先端科学を支える創造性を学ぶ教育プログラム

今後もプログラムを改良し、新たな分野に関するプログラムを開発するなど取り組んでいきたい。来年度は「バイオエネルギー研修」等、E S Dの視点に立ったプログラムをさらに充実させ、海外研修と組み合わせ実施したい。

2 教科学習における創造性を育む研究

創造性を引き出すような教材の選択や授業展開を行うとともに、生徒が自己質問をつくることに喜びを感じるような工夫も同時に行う必要がある。生徒の探究活動に如何に足場（スキヤンホールディング）を与えるかが課題である。

3 ESDの内容開発

生徒に「持続可能」という視点で諸問題を考えさせたところ、自主的に地球規模の諸問題に関心をもち、積極的にこれを解決しようとする意欲・態度が芽生え始めた。世界のユネスコスクールと連携し、継続的・体系的に実践を積み重ねることが引き続き今後の課題である。また、地域の教育素材を活用し連携を深めることも考えられる。

4 学校設定科目の内容開発

「サイエンスコミュニケーション」、「数理解析」、「宇宙・地球科学」、「生命科学」の内容をさらに発展させる。また、来年度は昨年度に引き続き「ESD」の開発を行う。「サイエンスコミュニケーション」における国語科と英語科との連携をさらに密なものにしていく必要がある。

5 海外研修プログラムの開発

オーストラリアの研修地を環境開発にも適したケアンズに変更し、熱帯雨林・サンゴ礁の見学や自然・環境に関する学習をさらに進めていく。